



Title	中島敦「盈虚」論
Author(s)	廖, 秀娟
Citation	阪大近代文学研究. 2003, 1, p. 66-78
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92617
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中島敦「盈虚」論

廖 秀娟

一、はじめに

「盈虚」(昭十七・七『政界往来』原題「或る古代人の半生」)は原題が示した通り主人公蒯聵の「半生」を描いたものである。蒯聵は継母南子刺殺未遂で出奔するが、十六年の歳月をかけて自らの子を追払って衛侯の座を取り戻す。しかし、人民のために善政を施すことなく、自分の欲望を満たすだけで、ついには臣下の謀反と晋国の侵入によって悲惨な最期を迎えたという内容である。

研究史において、この作品は本格的に考察されることなく、作品の成立時期の問題^①、或いは、「弟子」(昭十八・二『中央公論』)との関連^②で触れられるのが常であった。数少ない作品論の中では、「実存的な生き方」という観点から評価すると実にくだらない作品になって了う。感銘度も薄い^③、「独自なるものが薄く」、「結晶性が低い」^④と批判されており、作品自体の評価は決して芳しいとは言えない。その理由は闘鶏戯への耽溺や復讐への暗い情熱に

取り憑かれた蒯聵の姿が「愚か」^⑤にみえ、自らの快樂の追求に溺れた結果、迎えた悲惨な最期が「因果応報的」^⑥に思われるからである。

作品は主に次に挙げる三つの時期で構成されている。

① 南子刺殺に失敗し亡命を強いられた時代から、クーデターを経て即位に至るまでの〈蒯聵の亡命時期〉。

② 莊公に即位した絶頂期から太子疾の専横、晋国の圧迫に脅かされ再び闘鶏に溺れるようになるまでの〈莊公前期〉。

③ 戎人己氏との因果関係を絡めて迎えた悲惨な最期までの〈莊公後期〉。

①と②においては、蒯聵の父靈公、息子輒、公子疾との葛藤を中心に、特異な親子関係が描写される。だが、③に至ると、親子に関する描写が後退し、己氏との因縁関係が中心に据えられている。莊公(蒯聵)の命令によって、己氏の妻の髪が切り取られたことがきっかけとなり、結末では

蒯聵は己氏に殺されてしまう。そこで、その蒯聵の死が諸氏の指摘した如く「因果応報的」と捉えられるのである。

しかし、この読みに従うと、③に描かれた己氏との因果関係しか重んじられず、①と②の部分が無視されたことになる。そもそも作者の意図は果して「因果応報」にあるのかということについて考え直す必要があるのではないか。本稿では①から③までの各時期に沿う形で、主人公蒯聵が、周囲、特に親と息子達との関係に照射を加え、分析を行い「盈虚」論に新たな読みを提起したい。

二、〈正義〉への思い

物語は、衛の靈公三十九年の秋に、太子蒯聵が父の命を受けて斉に使したことから始まっている。途に宋の国を過ぎた時、農夫共の唄に思い当たることがあり、蒯聵は顔色を変え、南子が衛に嫁ぐ以前、宋の美男宋朝と醜関係があったことは、「靈公以外の誰一人として知らぬ者は無い」。そして、今も二人の関係は再び衛の公宮で公然と続けられているのである。蒯聵はその宋の野人の歌った牝豚牡豚とは「疑ひもなく」南子と宋朝とを指していると確信し、それを契機に「何も知らない」父靈公のため、「淫婦刺殺」という大義名分の旗を掲げて、南子刺殺に挑んだ。彼は自らの行動を正義のための「義舉」だと見なしていたのである。しかし、作品の冒頭部後半では、蒯聵の「側臣」であり、

刺殺の実行者でもある戲陽速がもう一つの可能性を提示する。

太子は私を脅して、自分の義母を殺させようとした。承知しなければ屹度私が殺されたに違ひないし、もし夫人を巧く殺せたら、今度は必ず其の罪をなすりつけられるに決まつてゐる。(一)

ここでは、蒯聵が自分自身思い描く正義の闘士像と全く正反対の、〈計算高い〉蒯聵像が浮かび上がってくる。もちろん、戲陽速が自らの臆病さを弁明するための言葉とも考えられるため、蒯聵の言葉を覆すまでには至らないが、完全に信用することもできない、所謂〈藪の中〉の状況に陥っている。そこで、自らの正義性を固く主張する蒯聵の言い分と、他人に罪をなすりつけようとする蒯聵の陰險な計算を訴えている戲陽速の言い分の食い違いによって、蒯聵の動機をめぐって少なくとも二重の解釈にならざるをえない(二)。その中で、蒯聵の動機を明らかにする際に、蒯聵の南子に対する感情を検討することが有効な手がかりとなる。「容色よりも寧ろ其の才氣で以てすつかり靈公をまるめ込んでゐるのだが、此の夫人が最近靈公に勧め、宋から公子朝といふ者を呼んで衛の大夫に任じさせた」。この引用から、南子の靈公に対する影響力は政治や官吏の任用にまで及んでいたことがわかる。自らの情夫を側まで呼び寄せ、人目

を憚らずにその醜關係を「おほつびらに」続ける南子の行動から、靈公及びその宮廷の人々が彼女の眼中にないという現実を語っている。したがって、蒯聵は自らの行動を「義舉」と思う裏には、南子の「悪行」が彼の念頭にあると考えられる。もちろん、刺殺に失敗して晉に逃れた蒯聵が、「淫婦刺殺といふ折角の義舉も臆病の莫逆者の裏切によつて失敗した」と失敗の原因を「人毎に語つて言つた」ため、その言い分は、《建前》という可能性も退けられない。

作品中、クーデターの成功で政權を得て莊公に即位した蒯聵が復讐に急ぐ姿が描かれたところでは、蒯聵の十六年間にわたる南子への気持ちに叙述されている。

己の亡命の因であつた先君の夫人南子が前年亡くなつてゐたことは、彼にとつて最大の痛恨事であつた。

あの姦婦を捕へてあらゆる辱しめを加へ其の揚句極刑に處してやらうといふのが、亡命時代の最も偷しい夢だつたからである。(四)

十六年間の歲月が過ぎた現在、蒯聵が過去を清算する際に、事件の経緯や真相を究明せずには即断した父靈公について、恨み言を一つも並べないのに対して、右記の傍線部が示したようにすべて南子に矛先を向けている。繰返しになるが、これは蒯聵の内面が語られる場面であるため、彼が《誰か》を意識して南子への憎悪の気持ちを見せかける必

要は全くない。彼は南子を「あの姦婦」と称し、「己の亡命の因」であり、「南子に逐はれ」たから出国を強いられたと思つてゐる。長年を経ても南子に極刑を加える夢を諦めない理由は、まさしく《正しい》自分を虐げた南子に仕返しをしたからである。そこから彼が自らの行動を《正義性》のあるものと見なしていることが確認出来る。

そこで、一つの疑問が生じる。それは、語り手が蒯聵の《正義のため》という動機を語る一方、「急に臆したものか」と戲陽速の行動を断定せず、彼の言い分も盛り込み、両者の意見が齟齬するかのように語る意図は何であろうかという疑問である。ここで、再び戲陽速の言葉を検討する。「太子は私を脅して、自分の義母を殺せようとした」と、彼は蒯聵が「義舉」と定義したこの「刺殺」を、《継母殺し》と解釈した。南子刺殺をめぐる蒯聵、戲陽速両者の認識のズレが目立っている。戲陽速の言葉の真偽はともかく、蒯聵が自らの行動に寄せた思いを正確に他者に伝えなければ、その行動がいくら「義舉」と訴えられても、他人の目には単に《継母殺し》にしか見えないということが戲陽速の言葉を通して明らかにされた。

また「既定爾婁猪 盍歸吾艾緱」（牝豚はたしかに遣つた故 早く牡豚を返すべし）という農夫の歌を即座に南子と宋朝の關係に結びつけ、「疑ひもなく」確信したのは蒯聵であつて、果して農夫達がその意味で歌っていたのかはわからない。更に、「太子は齊から歸ると、側臣の戲陽速を呼ん

で事を謀つた。翌日、太子が南子夫人に挨拶に出た時、戲陽速は既に匕首を呑んで室の一隅の幕の陰に隠れてゐたと傍線を付したように、斉の道端で唄を聞き、刺殺行動に突進するまでの時間は短かった。このスピードから考えれば、蒯聵の〈正義〉への思いがどれほど正確に戲陽速に伝わったのか疑わしい。

更に言えば、蒯聵が〈正義〉と認識したこの行動は、どこまで周囲の共鳴を得たのかも疑問である。「兵を召して太子を討たせよう」と命じた靈公の反応からみれば、蒯聵の思いは恐らく父には伝わらなかつたと言える。思慮が浅く短絡的で未熟さがあつたが、〈正義〉を守るため、果敢に行動をとつた蒯聵はあくまでも、語り手が言つた「氣まぐれで我が儘だつた白面の貴公子」であつたのである。

語り手が事実を明確にせず断定を避けることで、少なくとも二重の解釈を作品に孕ませた意図は正にここにあると考えられる。衝動的で無計画ではあるが、〈正義〉のために闘う蒯聵を描く一方、その思いが周囲の人々に理解されていないのにもかかわらず、蒯聵は当然のように周囲の人々も〈己〉と同じ認識を有しているはずだと思ひこむ。その理解されていないことを認識できていない蒯聵の一面を、戲陽速、そして靈公の視点ないし行動を描くことによつて照らし出したのである。

このような一面は蒯聵と息子輒との関係にも見出すことができる。晉に逃れた蒯聵が、遙かに父衛侯の計を聞いた。

太子のいない衛国では蒯聵の息子輒を立て位に即かせた。この噂を聞いた蒯聵が次のように思つた。

當然自分の異母弟の一人が選ばれるものと考へてゐた蒯聵は、一寸妙な氣がした。あの子供が衛侯だと？

三年前のあどけなさを考へると、急に可笑しくなつて來た。直ぐにも故國に歸つて自分が衛侯となるのに、何の造作も無いやうに思はれる。(二)

「當然自分の異母弟の一人が選ばれるもの」と思つた蒯聵が想定した〈相手〉は腹違いの兄弟である。だが、彼の予想に反して、衛侯になつたのは息子輒であつた。ここで留意したいのは、それに対して彼は「妙な氣がした」ということである。「あの子供が衛侯だと？」という口調から、蒯聵は〈相手〉が「子供」であることで、侮る気持ちが生じた一方、自分と血が繋がつて、その上、「愛らし」い、「あどけな」いという、親の息子に対する愛情も同時に示されている。彼は息子輒を〈敵〉として考えなかつた。一方、息子輒の立場で考えてみれば、宿敵晉国の軍に擁せられ意氣揚々と衛の地に入ろうとした父はまさしく我が位を奪おうとする〈敵〉にしか見えない。そのような輒側の心理や視点への考慮が蒯聵には欠かしている。

南子を寵愛し、〈何も知らない〉父靈公の不理解は蒯聵の念頭にあつたろうが、彼は父の計が伝えられてくるまで晉

の都にじつとしていた。しかし、父と違つて、南子の「悪行」を共に見てきた人々は、もちろん「愛らしかった」息子、「目をかけてやつた諸大夫連」も含め、「己」の行つた行動に共感を持ち、支持してくれるはずだと蒯聵は信じていたのである。この心理が働いているからこそ、彼は「直ぐにも故國に歸つて自分が衛侯となるのに、何の造作も無い」、「己の當然嗣ぐべき位」などの言葉を發したのである。

論じてきたように、彼の思う「正義」と周囲の認識との間に大きな懸隔が存在しているにもかかわらず、その懸隔に一向に気付かない彼は、自らの価値観で世界を見ているのである。「折角の義舉も臆病な莫迦者の裏切によつて失敗した」と蒯聵は、南子刺殺の失敗原因を戲陽速の「臆病」にあり、行動の失敗に一つの答えを付けたゆえに、彼は自らの無謀さ、思いこみ、とりわけ、周囲との認識のギャップに気付かずしていた。彼は行動の失敗に腹を立てていたが、自らの為した行動の「正義性」について少しも疑わない。父の死によつて自らの帰國を阻止する原因が無くなつたにもかかわらず、その報い、支持は何故訪れてこなかつたのかという疑問に遭遇する時に、彼はそれを「曾ては愛らしかつた」息子輒の「貪慾」、「曾て目をかけてやつた諸大夫連」の忘恩と忠誠心の欠如に帰した。その思つた「正義」が満たされないことへの、腹ただしさ、不満、不平によつて彼は語り手の言う「刻薄で、ひねくれた中年の苦勞人に」

なつたのである。

やがて渾良夫の策謀で蒯聵は息子輒から政權を取り戻し、十六年ぶりに故國の土を踏んだ。蒯聵が衛侯に即位後まず行おうとしたのは「過去への復讐」であつた。しかし、彼の復讐対象があくまでも「己を虐げた者」、「己を蔑んだ者」、「己に同情を示さなかつた者」、「過去の己に對して無關心だつた諸重臣」に限られていることに注意せねばならない。彼にとつて最も大きな意味を持つてゐるのは、これらの人々が当時「正義」の名のもとで行動した「己」を見捨てた人々だということである。そして、それに合わせて「極刑」「懲しめ」「冷遇」など程度に差をつけて処罰を下したことは、彼が残酷無道の人間ではなく、彼の中にある「基準」に基づいて対処していることを反映している。

彼は当時「正義」を為した自分を裏切つた人々を処罰する一方、「己」を支えてくれた人々に奨励を与えた。「己と亡命の苦を共にした公子疾を彼は直ちに太子」に、クーデターにぬかりなく策謀を巡らした渾良夫を大夫にたてた。彼の挙動から考えれば、この一連の行動は単なる復讐や報奨ではない。むしろ蒯聵はそれを「正義」の裁きだと認識していると思われる。したがつて、奪權の成功により、衛國の位を手に入れた彼は自らの行動にある「正義性」や価値観の「正しさ」を再確認したと言える。

三、〈他者〉の顕現―息子疾という存在

蒯聵が過去に恩愛を与えた人々に見捨てられていた時期、新衛侯に即位した輒とは異腹の弟・疾が、母親と共に蒯聵の許に赴き、そこで一緒に暮らすようになった。本文中に、公子疾と彼の母親が戚の地に赴く理由は語られていない。いずれにせよ、蒯聵にとつては人々に裏切られたと思つていたところに「直ぐに」訪れてきた公子疾のその行動こそ大きな意味を有している。それは彼が公子疾を「唯一つの慰め」と見なし、「志を得たならば必ず此の子を太子に」と「固く」決めたことから窺える。

しかし、不遇の時代から蒯聵が唯一無償の愛を注いで「唯一つの慰め」であるはずの息子疾は何故か殺意を持つてじわじわと迫ってきた。作品中、疾の心中が語られることはなく、その行動のみが描かれる。以下、疾の行動に焦点をあて考察を進める。

ある夜、莊公（蒯聵）が渾良夫に向つて前衛侯に持ち去られた累代の国の宝器を如何に取り戻すべきかを図る際に、渾良夫は前衛侯を呼び戻すことを莊公に提案した。慎重に人払いをした上でのこの密談が何故かそのまま疾の耳に入つた。その理由は「其の部屋の何處かに密偵が潜んでゐたものらしい」と推定された。この一言が疾という人物の性格の一端を如実に物語っている。疾は父莊公の側にスパイを置き、監視している。つまり、自らの相続権は「固く」保証されているが、疾は逐一父の挙動を監視せずには安心

できず、大きな不安に襲われていることは明らかである。その不安に煽られた彼は、渾良夫の存在を危惧し、最後には既に自分の言いなりになっている父莊公の存在すら不安になり、殺そうとするまでに至つたのである。

彼の不安はどこに由来するのか、その答えは過去にあると考えられるが、過去の生活が描かれていないため、知る由もない。一方、蒯聵が莊公に即位した後、彼の内面描写が大幅に省かれている。例えば、疾の脅迫に「すつかり氣を吞まれ」、「唯々として「諾」と答へるほかは無い」、渾良夫が殺された時に「眞蒼な顔をした儘」など、外側から蒯聵の反応が描かれるだけである。このような語り手の視点変化により、疾以外に唯一過去を知っている蒯聵からの情報も遮断された。疾の変貌は謎めいており、不可解なものとして描かれている。こうした中で、隠蔽されたこの親子の過去を探るために、唯一残されたヒントは「鬪雞」である。

蒯聵が晋国にいた頃は、趙氏がすこぶる厚遇したとは言え、衛にいた頃の身分とは異なっている。晋の力を借り位を奪い返すため、蒯聵は常に晋国の顔色を窺わざるを得ない窮境に置かれている。その上に、晋国が蒯聵を支持する理由は、「反晋派たる現在の衛侯に楯突かうとしたに外ならぬ」と、あくまでも政策上の利点からである。この「餘り裕かでない生活」の中で彼は鬪鶏戯に夢中になった。

射倖心や嗜虐性の満足を求める以外に、遅い雄雞の姿への美的な耽溺でもある。餘り裕かでない生活の中から莫大な費用を割いて、堂々たる雞舎を連ね、美しく強い雞共を養つてゐた。(二)

彼が闘鶏戲を通して求めるものは、闘鶏に見られる嗜虐的な精神、強さ、遅しさである。「土地の民衆の機嫌をとりながらはひらなければならぬ始末であつた」という言葉の裏に、人に媚びることに不慣れで、嫌でたまらない崩職の素顔が見られる。そして「不遇時代に惨めに屈してゐた自尊心」、「己の過去の惨めさを思出し、少からず自尊心を害した」などの言葉から、彼に強固な自尊心を見出すことができる。そのようなプライドの高い崩職にとつて、我を曲げざるをえない現実、如何にも耐え難いものである。惨めに踏みにじられて屈せざるを得ない自尊心を、闘鶏の遅い姿によつて構築された世界に託し、屈辱の現実から逃避しようとしたのではないか。

なぜならば、闘鶏を自らの命同様に考えている崩職が、一時闘鶏戲を忘れた時期があつたからである。その時期は、彼が政権を取り戻し、屈していた自尊心も「俄かに傲然と膨れ返」つてき、過去に自分を虐げた者に思うままに復讐できる時期であつた。彼がかつて亡命中に「高冠昂尾」、意氣鷹揚として遅しくて強い闘鶏の姿を通して求めた自尊心が、奪権の成功によつて現実の生活で満たされたのだと言

えよう。そして、晋国の圧迫と息子疾の専横で、彼は「一時忘れられてゐた闘鶏戲への耽溺も再び始まつた」。それは彼が、自尊心が再び脅かされたことを意識したこと、の兆しである。崩職の闘鶏に溺れる時期を考えれば、彼にとつて闘鶏は必ずしも欠くことの出来ない存在ではなく、それはある種の極限の状態、つまり自らの自尊心が踏みにじられた時期にしか機能しないことが指摘できる。

では、この闘鶏の機能から、崩職と疾の親子關係について考えてみる。十六年間の亡命生活を終えて莊公に即位した崩職は公子疾を次のように思つた。

まだほんの少年と思つてゐたのが、何時しか堂々たる青年の風を備へ、それに、幼時から不遇の地位にあつて人の心の裏ばかりを覗いて來たせぬか、年に似合はぬ無氣味な刻薄さをチラリと見せることがある。(四)

「まだほんの少年」、「何時しか」これらの言葉から一つの事実が明らかにになる。それは、公子疾が崩職の「唯一つの慰め」であり、長年彼の側にいるにもかかわらず、崩職は息子疾の成長や変化を把握できなかったという事実である。息子の「無氣味な刻薄さ」を「不遇の地位にあつて人の心の裏ばかりを覗いて來た」ことによつてもたらしたと考えているが、それはあくまでも、十三年経つた今、崩職が自らの視点で息子の変化を推測したに過ぎない。では、

何故蒯聵は最も身近である息子疾の成長や変化を把握出来なかったのか。

先ほど触れたように、蒯聵は強固な自尊心の持ち主である。晋国の「威猛高な」態度の下では、いくら亡命する前に衛国の太子であつたとはいえ、そのプライドを曲げざるを得ない。したがって、彼にとつて自分の「惨め」な姿を包み隠さずこの息子にさらけ出さざるを得ない亡命生活は屈辱的と考えられる。自らの父たりえないという負い目から、彼は息子の眼差しを過剰に感知し、それと向い合うのを恐れたのではないか。その息子の視線を過剰に感知したからこそ、彼は息子が見せたその「無氣味な刻薄さ」を「人の心の裏ばかりを覗いて来た」からだと推測した。屈辱的な現実や息子の視線から自らの自尊心を守るため、彼は鬬鷄の世界に逃げ込んで、現実と向い合おうとしない。長年に渡つて蒯聵は息子を溺愛し、彼の欲求を満足させつつも彼の視線を避け続けてきたと考えられる。それが原因で、「子の不遜と父の讓歩」という接し方になつたのであろう。

鬬鷄に没頭し、現実を目を向けようとしないう父を前にした疾は、むしろ孤立無援の境地に置かれたと言えよう。その無力さから強い不安が生まれたと考えられる。しかし、鬬鷄の世界に耽溺する蒯聵は、息子疾の抱える不安や焦りを理解する余裕がなかった。そして、いざ、権力の奪還により自らの自尊心を取り戻した蒯聵が、成功を収めた父として息子と向い合おうとした時、息子は「何時しか」青年

になつていた。その長年に渡つて出来た空白により、彼は息子がちらりと見せたその「無氣味な刻薄さ」が何なのかを判らず、息子疾の（理由のない）殺意に対して「色蒼ざめて」、「唯々として」、「眞蒼な顔」をするしか対処できない。莊公蒯聵の目からみれば、息子はただ「無氣味」な存在であつて、理解のできない恐怖の（他者）に変身してしまつたといつてもよい。

無論改めていうまでもなく、問題とされるべきは、自らの認識と周囲との（ズレ）を認知できない蒯聵のほうである。それは、靈公、息子輒との関係にとどまらず、長い亡命歲月を共に過ごした息子疾との関係においても同様である。

作品の前半では蒯聵の内心思惟を微細に叙述する語り手が、後半にはいると、蒯聵の内面に立ち入ることが少なくなり、疾の変貌原因でさえ、最後まで語らない。語り手はひたすら外側から疾の行動と蒯聵の反応に焦点をあてて描くことに徹する。この語り手の視点変化により、疾の（行為）の「無氣味」さがকাশし出され、強調されと言える。この「無氣味」な疾の姿からは、息子という恐怖の（他者）に怯えた蒯聵の（畏怖）が浮かび上がってくる。

四、〈悪意〉の形成

最終段落で蒯聵は臣下の叛乱によりやむを得ず後門より

逃亡することを迫られた。従った侍臣が多く討たれた中、
崩職一人が草の中を匍いつつ逃れ、やつと一軒の家に這い
込む。しかし、その家はほかならぬ彼が髪を奪い取った戎
の女の家であつた。崩職が自らの手で地を匍つて逃げ込ん
だ家なので、彼は「自分の手で自分を袋小路に導」き、「知
らず知らずにみずからを死へ追いこんでしま」い、「この男
(筆者注：己氏)との、こうした形でのお合ひは彼の運命
には必然なのである」と佐々木充氏は指摘している(10)。
作品中、戎女の夫己氏が丸坊主にされて帰ってきた妻を
見ると、「直ぐに被衣を妻にかづかせ」た。己氏の行動から、
彼は妻が丸坊主されたことを恥辱と見なしていることがわ
かる。そのため彼は城楼の上に立つている「衛侯の姿を睨
み、「役人に答打たれても、容易に其の場を立去らうとしな
い」。崩職に対する根強い恨みが窺えるこの己氏の姿を念頭
におけば、彼が作品の末尾に崩職の「どうか、見逃して呉
れ」という命乞ひに対する「お前を殺せば、璧が何處かへ
消えるともいふのかね？」という問いは極めて当然と思
われる。恨みを強く持つている彼が、崩職を許す可能性は
全くない。しかしながら、いくら客観的な事実をあげ、彼
の己氏とのお合ひひいてはその迎えた最期を「必然」と見
なしても、崩職自身は、必ずしもそれらを自らの運命の「必
然」と認識するわけではないのである。

では、崩職は最後の場面において己氏とのお合ひをどの
ように認識したのかについて考えてみたい。崩職は或る夜、

渾良夫の出た夢をみた。

小さき瓜を此の大きさに育て上げたのは誰だ？ 惨め
な亡命者を時めく衛侯に迄守り育てたのは誰だ？ と
樓上で狂人の如く地団駄を踏んで喚いてゐる彼の男の
聲にも、どうやら聞き覚えがある。おやと思つて聞き
耳を立てると、今度は莫迦にはつきり聞えて來た。「俺
は渾良夫だ。俺に何の罪があるか！ 俺に何の罪が在
るか！」(一八)

崩職がこの夢を見たのは、波線部のように、惨めな亡命
時期に助けてくれた渾良夫を見捨ててしまつた崩職の自己
呵責だと考えられる。しかしながら、彼はただこれを「い
やな」夢と見なし、その「不快さ」を追い払おうとする。
彼はこの気持ちと向かい合おうとしないのである。

夢の中で渾良夫は崩職に自らの無罪を訴えている。しか
し、渾良夫の行動を振り返ってみると、渾良夫の無礼な行
動は、確かに疾の言う通り、不敬の罪を犯している。「君候
父子を離間」するという四つ目の罪について、仮にその行
動が大きな罪ではないなら、渾良夫は慎重に「燭を執る侍
者を退席させ、自ら燭を持つて公に近付き、低聲に言つた」
と疚しそうな挙動をとる必要はないはずである。この進言
がおおやけに洩れると罪になることは渾良夫自身にも自明
だと言える。しかし、この夢によつて生じた「いやな氣持」

を追ひ払うことに急いだ蒯瞞はこの夢、とりわけ、夢に出た渾良夫の怒りに客観的に対処することができなかった。

蒯瞞は夢によつて生じた不快感を追ひ払うため露台に出たが、ちょうど赤銅色に近い紅く濁つた月が野に出たところであつた。彼はその月を「不吉なもの」として見なした。

この夢、月を見た蒯瞞が気になるままに筮竹を取つて卜した。筮竹を取つて卜することは、渾良夫の出た夢とこの「赤銅色の月」が何らかの因果的な連鎖で結ばれていると蒯瞞に意識されていることを示す。しかし、その卦は又も彼の前途の暗さを予告したものである。「夢」、「月」、「卦」は蒯瞞の渾良夫への負い目から深く結びつけられ、彼を脅かしてくるものとして認識された。

晉軍と臣下の叛乱で逃亡を余儀なくされた蒯瞞は、後門から逃げ出そうとした。

月の出ぬ間の暗さに乗じて逃れねばならぬ。(中略)
大分歩いた頃、突然空がぼうつと灰黄色く野の黒さから離れて浮上つたやうな感じがした。月が出たのである。何時かの夜夢に起されて公宮の露臺から見たのとまるでそっくりの赤銅色に濁つた月である。いやだなと莊公が思つた途端、左右の叢から黒い人影がばらくと立現れて、打つて掛つた。(十)

「月の出ぬ間」に逃れねばならない時に、月が現れ、しか

も、彼はその月を夢を見たあの夜に露台で見た「赤銅色の月」と「まるでそっくり」の月であつたと認識した。この月を見た途端に、「いやだな」と思つた彼にとつては頭上にあるこの月は既に自然現象の月ではなくなり、あの夜の「不吉さ」と結びついた月となる。彼の脳裏には、あの夜に夢見た渾良夫の姿、自らの残年を予言した卦が再び想起されたと考えられる。

原の一隅に人家らしい一郭が見えた時に、「不思議と」思つた彼には一縷の望みが生まれたに違いない。しかし、それは己氏の家であつた。薄暗い灯の下で己氏の妻を見た時、蒯瞞は「思はず鶏の死骸を取り落し、殆ど倒れようとした」。絶望の中で救われるという望みを彼は抱くが、容赦なく更なる厳しい境遇に突き落とされる。渾良夫の出た夢におののいた蒯瞞の目にこの一連の遭遇は正に「悪意」の仕業としか映らない。「赤銅色に濁つた月」によつて「夢」、「卦」が次々と喚起され、その「悪意」が徐々に巨大化、形象化され、やがて「緒ら顔の・前齒の大きく飛出た」己氏によつて具象化された。

死ぬ直前に、彼が己氏に「許せ」と願いつつも「顛へる手で身に佩びた美玉をとり外し」、「これをやるから、どうか、見逃して呉れ」とまたもや自らの《論理》で、つまり、己氏の妻が無理に抜かされた髪は美玉で償えるものと思ひ、その美玉をもつて己氏の怒りに対処しようとした。しかし、前述したように、己氏にとつて蒯瞞の行為は決して簡単に

埋め合わせられるものではない。自らの価値観で世界を把握してきた彼は、結局死ぬ迄に、他者との間にある（壁）を突き破ることができなかったと言えよう。蒯聵の目には、父靈公、息子輒、疾を含め、人間が正に理解不可能の（他者）に化し、世界が「牛人」において叔孫豹が懼れた「世界のきびしい悪意」であるかのように映っていたであろう。

五、おわりに

本作品の末尾、蒯聵の臣下の謀反と晉軍の侵入が描かれたところには、「二説には又、太子疾との共謀によるのだともいふ」という史実を改竄した記述がある。「一説」にすぎないこの一言は、あくまで一つの可能性として提示されており、物語の進行に実質的な機能を持たない。それにもかかわらず、作者は語り手にこの「一説」を語らせる。この一言は「盈虚」を考える場合、軽視できない。作品の冒頭から蒯聵が自ら残年の短さを覚悟させられたところまで、丁寧に描きあげられていた蒯聵親子の葛藤というモチーフは、己氏の存在によって「因果応報」の物語になりかねない。そのモチーフを守るため、作者は無理があっても最後段落でこの一言が必要で入れなければならないと考えられる。全うしようとするのは父子という粹である。

「子・衛侯は即刻出奔、父・太子が代つて立つ」など文中に父子関係を強調する言葉が多用され、作品が創作される

際に意識的に盛り込まれたことが窺える。「父子相克」「骨肉相食む」「父親殺し」は蒯聵らの親子関係を捉える際によく使われてきた（二）。確かに靈公が息子蒯聵を討つように命じ、蒯聵が息子の輒を追い出し、息子の公子疾が蒯聵を中傷し、その位を奪おうと企図したことから、「骨肉相食む」ことを中心とする作品のように見える。しかし、本文中に親子のせめぎあい、殺戮の場面が淡々と簡略に描かれ、父靈公、息子輒、公子疾の内面に介入しないため、彼等の声が完全に遮断されており、あくまで蒯聵の憤り、恐れ、諦め、滅びに中心が置かれている。作者は蒯聵の認識した世界を相対化する働きを靈公、輒、疾に付与したのである。親子の描写にこだわったのは、親子というフィルターを通して、蒯聵の周りの認識との（ズレ）を浮き彫りにするためであろう。

前述したように、「盈虚」は主人公蒯聵の破滅物語として読まれてきた。登場人物の倫理批判が常に無駄だと言うわけではないが、復讐や闘争に没頭する蒯聵の行為だけを見てその破滅を即断する批評というものはいささか軽率なように思われる。問題は蒯聵が何故それらの行動を取ったのかにある。本稿では、蒯聵の視線、価値観に加え、彼の認識した世界に焦点をあて本作品を捉え直してみた。主人公蒯聵の姿によって照らし出された、（他者）との間にある越えがたい溝に立ち竦む人間の姿こそが「盈虚」を通して打ち出された命題であろう。

(1) 「盈虚」や「牛人」二編の成立時期については今まで中島敦の南洋行以前か以降か定かではなかったが、初出誌の発見(木村瑞夫「古譚」六篇説再考、『日本近代文学』三十九号、昭和六十三年十月)や参考資料の確定(村田秀明氏「盈虚」成立考、『国語国文学研究』三十号、平成六年十二月)により、その時期が昭和十七年五月後半から六月中旬までであると思われる、それをめぐる議論は収まった。

(2) 「盈虚」の登場人物や時代背景は「弟子」のそれと重複しており、脱稿時期も近かったため、「盈虚」を論ずる際には、「弟子」との関連が一つの重点とされてきた。たとえば、郡司勝義氏は『中島敦全集 第一巻』の解題(筑摩書房、昭和五十一年三月)で「弟子」を執筆中に生じた副産物でもあらうか」と指摘している。また、藤村猛氏は「中島敦「盈虚」と関連するもの」(『安田女子大学紀要』二十八号、平成十二年二月)で「両作品の接近か反発かいずれにしても、「盈虚」そのものを見ること、かつ、「弟子」との関連を見ることは意義があろう」と評価している。

(3) 西谷博之「中島敦「盈虚」と「牛人」の世界」『比較文学』二十号、昭和五十二年十二月

(4) 前掲藤村猛氏論

(5) 秋元誠『『古俗』考―世界のきびしい悪意―』『富山工業高等専門学校紀要』第二十九卷、平成七年三月

(6) 前掲藤村猛氏論

(7) 本作品は一行をあけることによって十段落に区切られている。説明の上、各段落を一一十とナンバーを打って便宜とした。以下、本文引用の後に記した番号は特別のことわりがなければ、各段落を示すものである。なお、本文の引用は『中島敦全集1』(筑摩書房、平成十三年十月)に拠った。傍線は筆者に拠り、傍点は作者に拠る。

(8) 蒯聵と戲陽速の言い分の食い違いをめぐって次の可能性が存在している。①蒯聵の言い分が真実である。②戲陽速の言い分が真実である。③二人とも嘘をついた。④二人とも嘘をついてない。

(9) ただし、留意しなければならないのは、それは蒯聵と公子疾の関係を描く場合に限っていることである。本文第七段落以後、晋国の趙簡子の行動によって「己の過去の惨めさを思出し、少からず自尊心を書した」、渾良夫の出た夢を見た時に「いやな氣持であつた」といったふうに、語り手が再び蒯聵の内面を語るようになる。

(10) 佐々木充『『古俗』二篇―超越者の貌―』『中島敦の文学』桜楓社、昭和四十八年六月

(11) 「古俗」二編にみられる「父親殺し」という構図について言及した論文を以下に挙げる。武田泰淳「作家の狼疾―中島敦『わが西遊記』をよむ」『中島敦研究』筑摩書房、昭和五十三年十二月。濱川勝彦『『古譚』から『古俗』へ』『中島敦の作品研究』明治書院、昭和五十二年九月。越智良二「牛人」の基底」

『国語国文論集』九号、昭和五十六年三月。張娜麗「中島敦の歴史小説―「盈虚」『学苑』六六五卷、平成七年五月。

（りようしゅうけん／本学大学院博士後期課程）